

# 平成12年度 リーダーズセミナー in 鳥取

21世紀に向かって翔け  
大いなる日本海へ



## 《目次》

1. 山根幸恵先生講演録要旨
2. 若良二先生講演要旨
3. リダー選手権大会記録
4. 竹中健太郎先生実技指導メモ
5. リーゼミを終えて
  - ・宮近幸逸先生
  - ・境英俊先生
  - ・戸田元丈幹事長
  - ・山下力実行委員長

## 中四国学生剣道連盟

期間:平成13年3月10～11日

主管:鳥取大学

# 武将『吉岡将藍』 - 千成瓢箪を奪った男 -

鳥取県剣道連盟会長

範士八段 山根幸恵

「新世紀へ向けて翔け」



## 防己尾（つづらお）城城主・吉岡将藍

鳥取県に吉岡という村がある。その村には小山池という湖があり、その湖の中には青島という島がある。島には昔の防己尾城の城跡が見える。その防己尾城ができたのは天正五～六年の頃であると言われている。昔、防己尾城城主で吉岡将藍という人がおり、彼は羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）との戦いで勝ち、その羽柴秀吉の馬印を奪ったという人物である。馬印というのは、戦いにおいて、その軍の大將の位置を示すもので、羽柴秀吉の馬印は瓢箪であったが、その瓢箪の馬印を奪うためには、戦いに勝たなければならなかった。

羽柴秀吉は天正五年に主人である織田信長から、当時毛利家の勢力下にあった山陰・山陽地方の制圧の命を受けた。そして羽柴秀吉の山陰地方制圧にあたっての最も重要となったのは、その鳥取城攻めであり、その時の鳥取城の城主は山名豊国であった。山名豊国は羽柴秀吉が鳥取城攻めをする際に秀吉が出した条件をのみ、早々と降伏することにより、鳥取城を守ろうとしたが、このことを潔いと思わなかった家老達により鳥取城から追放された。そのため、鳥取は新しい鳥取城主を決めなければならなくなった。そして毛利家から派遣された島根の吉川経家を次の新しい城主として迎え、羽柴秀吉との戦いに備えた。再び羽柴秀吉は鳥取城攻めを決定した。羽柴秀吉の戦い方としては、まず戦略態勢を整えてから、極力味方の兵の損害を抑えて、敵を強くたたくという戦い方が多かった。その羽柴秀吉に対して、鳥取側には戦いのために必要な約一ヶ月分しかなかった。また、羽柴の軍は二万余の兵を率いていたのに対して、鳥取は四千余の兵しかなかった。

その中で毛利に味方した防己尾城の城主である吉岡の父子を中心とする吉岡勢の武将たちが、鳥取城を包囲していた羽柴秀吉の軍勢の背後から攻撃を仕掛けた。羽柴秀吉は背後からの攻撃が邪魔だったので、部下の武将に防己尾城

を攻めるよう命じた。しかし、防己尾城を普通の小さな城と見ていたために、力攻めによって防己尾城を落とそうとしたが、うまくいかず大混乱に陥ってしまった。そこをついた吉岡勢が羽柴秀吉の馬印を奪ったということである。そのようにして鳥取の防己尾城は小さい城であったが、羽柴秀吉に一泡吹かせた城だった。

## 歴史に残るといふこと

羽柴秀吉は山陰・山陽地方制圧の際、前もって密偵をつかい、敵の食料の収穫状態や保存状況、これから戦いをするにあたっての諸勢力の配分状況等を綿密に調査・検討した上で、鳥取城を取り囲み「渴殺し」と呼ばれる方法、つまり兵糧攻めをした。その時、毛利家は鳥取城救援のために鳥取へ兵糧を輸送する目的で水軍を派遣したが、途中羽柴軍の兵によりその補給線を遮断されてしまった。結局、鳥取城は天正九年十月に完全に孤立無援となり、兵糧も枯渇した。同年十月二五日に戦いに敗れた鳥取城主の吉川経家は家臣全員の命を救うために三五歳で自刃した。

一方、先の鳥取城城主であった山名豊国は、城から追放されたあと、兵庫県に一万石の土地を与えられ、一國一城の主としての待遇を受けながら、羽柴秀吉のお側衆として仕えた。式典等の際には、将軍の衣装や装飾、所作等の補佐をする役職であり、有職故実の師匠であり、また連歌の重鎮でもあった。現在もその山名豊国の子孫は続いている。しかし、羽柴秀吉には子孫がない。歴史に意義を通すということは、

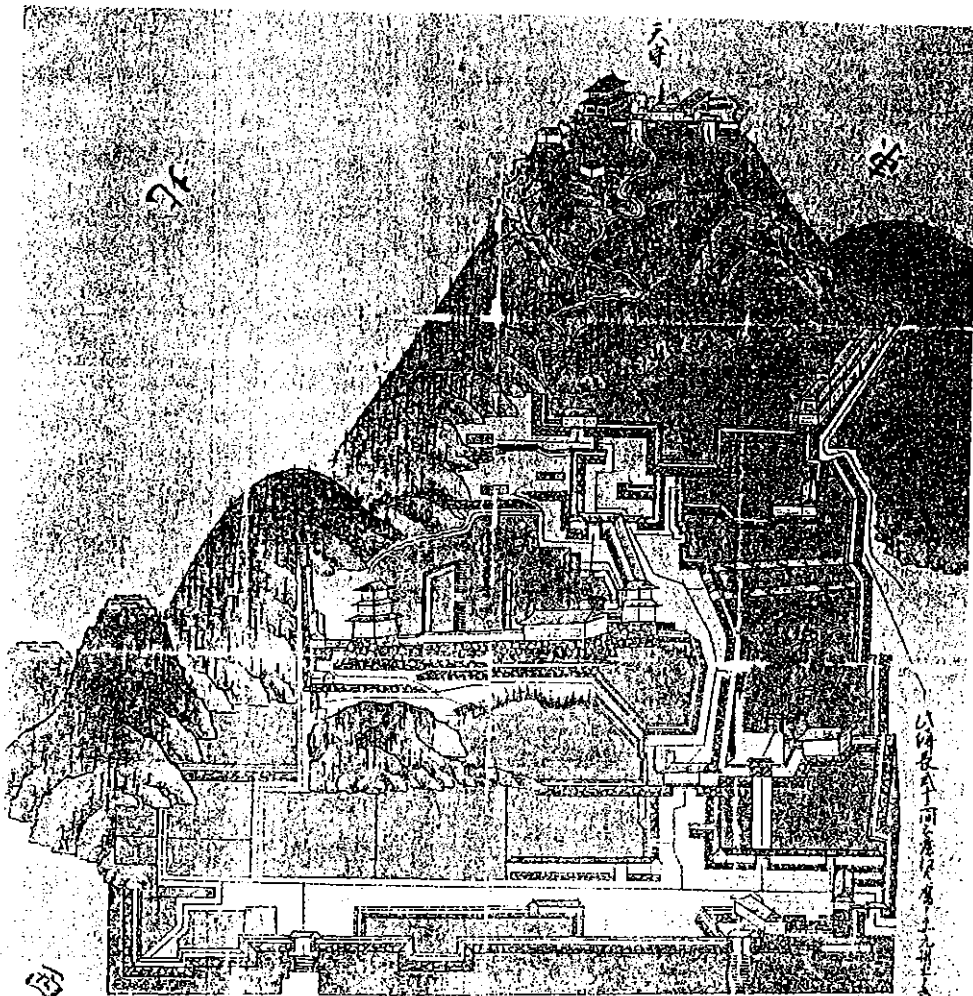
ただ武術が盛んな時に秀でた人だけが残るとい  
うことではない。他者が奪う事ができない何か  
を持っている者が、日本の歴史に残るのであ  
る。

### 学生剣道に期待すること

現在、剣道をしていて尚且つ長く続けて行こ  
うと思うと、それは大切な仕事となる。皆さん  
には正しく剣道をしてもらいたい。ただし、剣



道は打ち合いだけでその人固有の剣道ができる  
というものではない。剣道をしながりにしてそ  
れにまつわる自らの周囲の諸問題を、他人事  
ではなく自分のものとして取り込んでいく態度が  
最も大切である。大学生には、勉強をする時間  
がたくさん必要となる。その限られた短い時間  
の中で、剣道を自分の中にどう取り込んでいく  
か、それがその人個人の剣風につながる。剣道  
は、とってつけたような物ではなく、体の中か  
らにじみ出てくるものであるから、どれだけの  
ものを自分の中に蓄えることができるかが、大  
事な事になる。剣道は何歳になってもできる。  
問題は、何歳になっても元に戻って稽古する事  
ができるには、正しい剣道をするしかない。正  
しい剣道を丹念にして、自分のものにしなければ  
ならない。それによって初めて、剣道は寿命  
が長いといえることができる。自分の問題を次々  
に解決しながら、いかに処理していくかという  
処理の仕方を誤ったならば、その人の剣道は乱  
れていく。今の学業を大切にしながら、自分の  
大切な物を一つ一つ体当たりで解決していくと  
いうことが、一番大切であると思われる。



城絵図（天和3年・県立博物館蔵）

# リーダーのあり方

鳥取大学教育地域科学部

教授 若 良二

## 自分の世界観をもて

我々が生活している社会には多くの地域があり、また多くの集団がある。そして、それぞれの集まりの中には必ずリーダーという存在がある。そのリーダーという責任を果たすことは、容易なことではない。リーダーにとって大事なことは、その地域観、つまりは世界観を一体どこまで広げることができるのか、どこまで持つことができるかという事である。たいてい2～3人の少数での仲間内で会話をする時には、なんの問題も起こらない。しかし、それがその集まりの規模が大きくなると、ほとんど半数以上の人たちが発言をしなくなってしまう。それは結局その人たちがもっている世界観がそういう場に対応できていないからである。今日のように世界規模の時代になっていくと、対応できないというわけにはいかななくなる。自分の世界観をしっかり持って、その世界観を広げていくことを続けていかなければならない。

最近ではインターネット等が発達しているため、いつでも好きなときに自分の欲しい情報を世界中どこからでも手に入れることができるようになった。最近ではほとんどの人が持っている携帯電話からでもインターネットを利用できる。インターナショナル剣道フェデレーション(IKF)という剣道の世界を基盤とした組織がある。その連盟には現在、約40ヶ国が加盟している。その中でも特に日本の隣に位置する韓国では、ソウルでの世界選手権大会をきっかけに、剣道人口が急増した。最近ではその韓国の強さは、剣道王国日本に迫る勢いである。韓国の剣道の強さにはパワーとスピードという二つの大きな特徴があり、プロの選手まで存在しているほどである。スポーツにおいて様々な面で競い合う韓国と日本。その韓国は日本の奥義である剣道でも立派なライバルとして成長している。十年ほど前までは世界での剣道というものは想像できなかった。しかし、今ではこのような世界の舞台が我々の目の前に広がっている。情報がいくらでも入ってくるこの時代に、それをどのように使って、どう自分のものにするか



というところまで結び付けなければならない。つまり、自分自身が確固たる物を持っていないことには、いくら情報があっても役には立たないという事である。その剣道に対する思いを自分なりにしっかりと持って、ものの判断は適切であったかと常に考えていてほしい。

## 毛利元就の長男・高元のリーダーシップ

戦国時代の武将である毛利元就には3人の息子がいた。3人の内、一人は武術に優れており、もう一人は頭脳明晰であった。しかし長男の毛利高元はそのどちらも持っていなかった。そこで高元は武術や頭脳の面では弟たちに負けるが、自分の部下たちを支え励まし、彼らの持っている力を最大限に引き出してやることのできる、そういうリーダーになろうと考えたのである。

また、その息子である毛利輝元は関ヶ原の戦いの際に、西軍について徳川に負けている。ところが他の大名達の取り潰しが決まった中で、毛利家だけがそれまでの力が認められて生き残った。その代わりに大幅な領土の削減など、様々なペナルティーが課せられた。しかし輝元はその逆境の中でもなんとか生き延びようとして、狭い領地の中での新しい産業を起こすという政策をとった。領地にできるだけ多くの畑を作り、農作物の収穫量をいじしたのである。後にその毛利家は、江戸幕府末期に薩長同盟をつくり、倒幕の運動を実現させて行った。毛利家

のリーダーたちは苦しい決断をしながら、自分なりの新しいものを持ち出して、新しい発想の中で自分の世界観をつくっていったのである。このようなことからリーダーとしての心のあり方やものの考え方を学ぶべきである。苦しい時期の新しい発想はできないものだろうか。その時に必要なものは「心」である。自分一人ではないという心の支えがあるから、苦しい時期を乗り越えて行くことができる。



## 決断の要点

現在の世の中どのような人材が求められているのだろうか。大学生である皆は社会に役立つ人間になることをモットーとすべきである。自尊心を持ち、素直にものを受け入れ、誠意を尽くす。そして自主的に物事に関わって行く。リーダーとして物事を決断する際には次のことを考えてほしい。

その基盤にある物はなんなのか、  
自分に都合が良いからするのか、  
皆のためには必要だからするのか、  
自分の本音と建て前をごまかそうとしていないか、  
自分とまわりの人との信頼関係はあるのかないのか。

その基盤ができたなら、

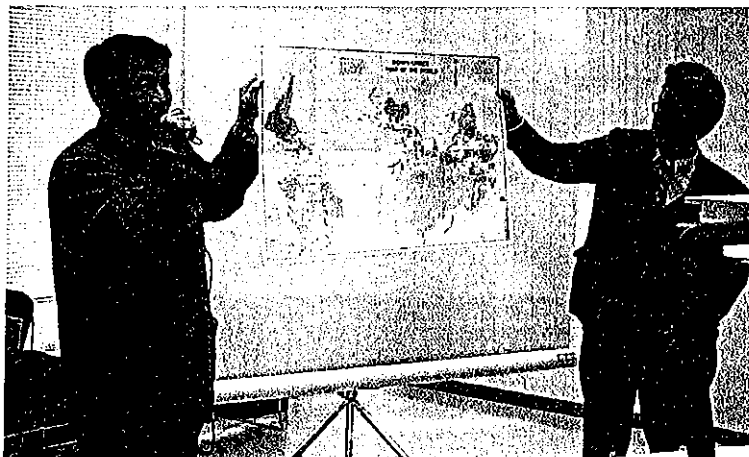
本当に自分はそれをやりたいのか、  
途中で嫌になって投げ出したりしないのか、  
もし、失敗しても、

自分は本当に責任を取れるのか  
ということである。そこで必要となってくるのは、周囲の人としっかりした世界観を持って信頼できる仲間をつくって物事を進めていくということが大事になったくる。つまり、自己責任

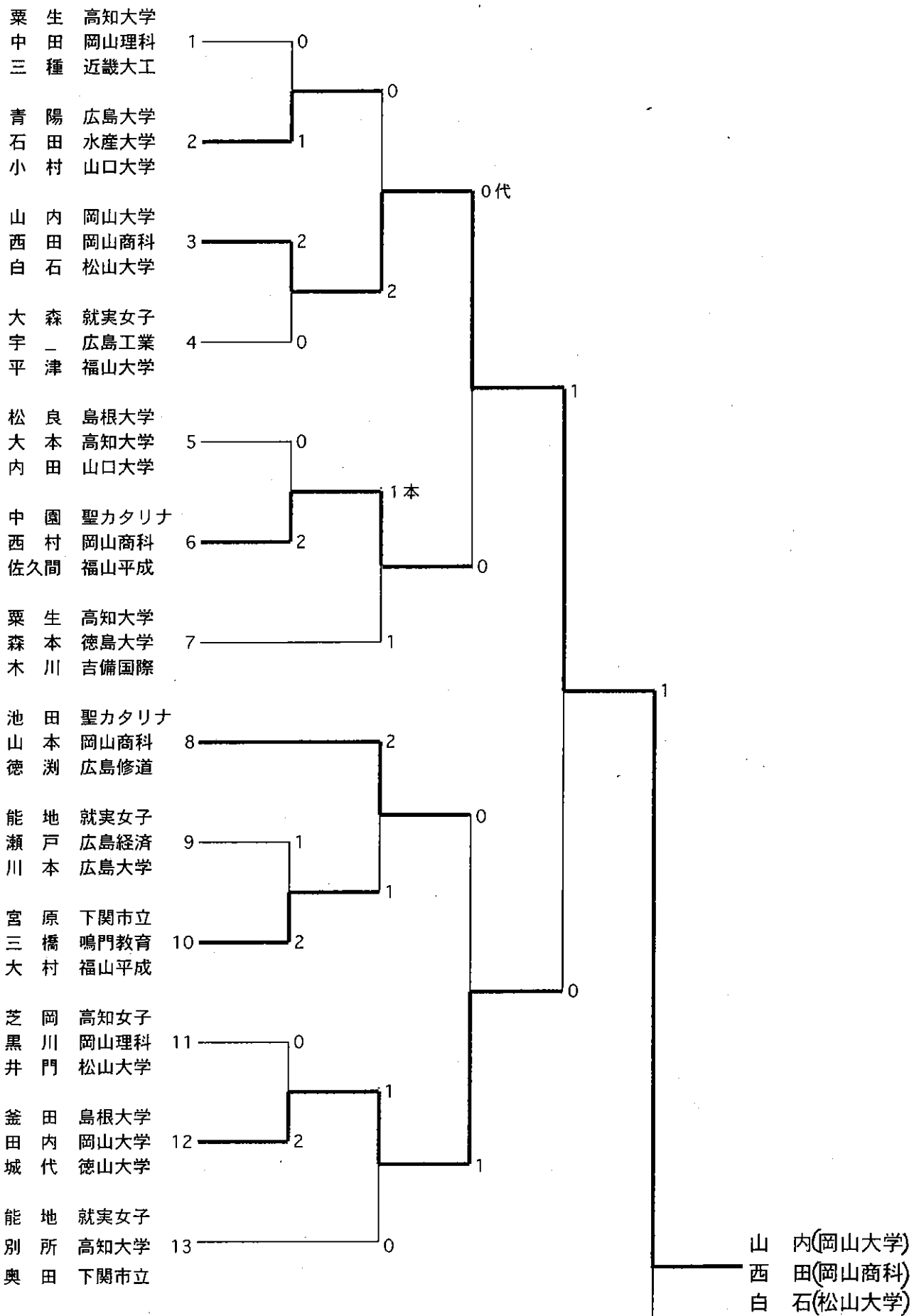
と信頼関係の上に立って物事を進めていくべきである。

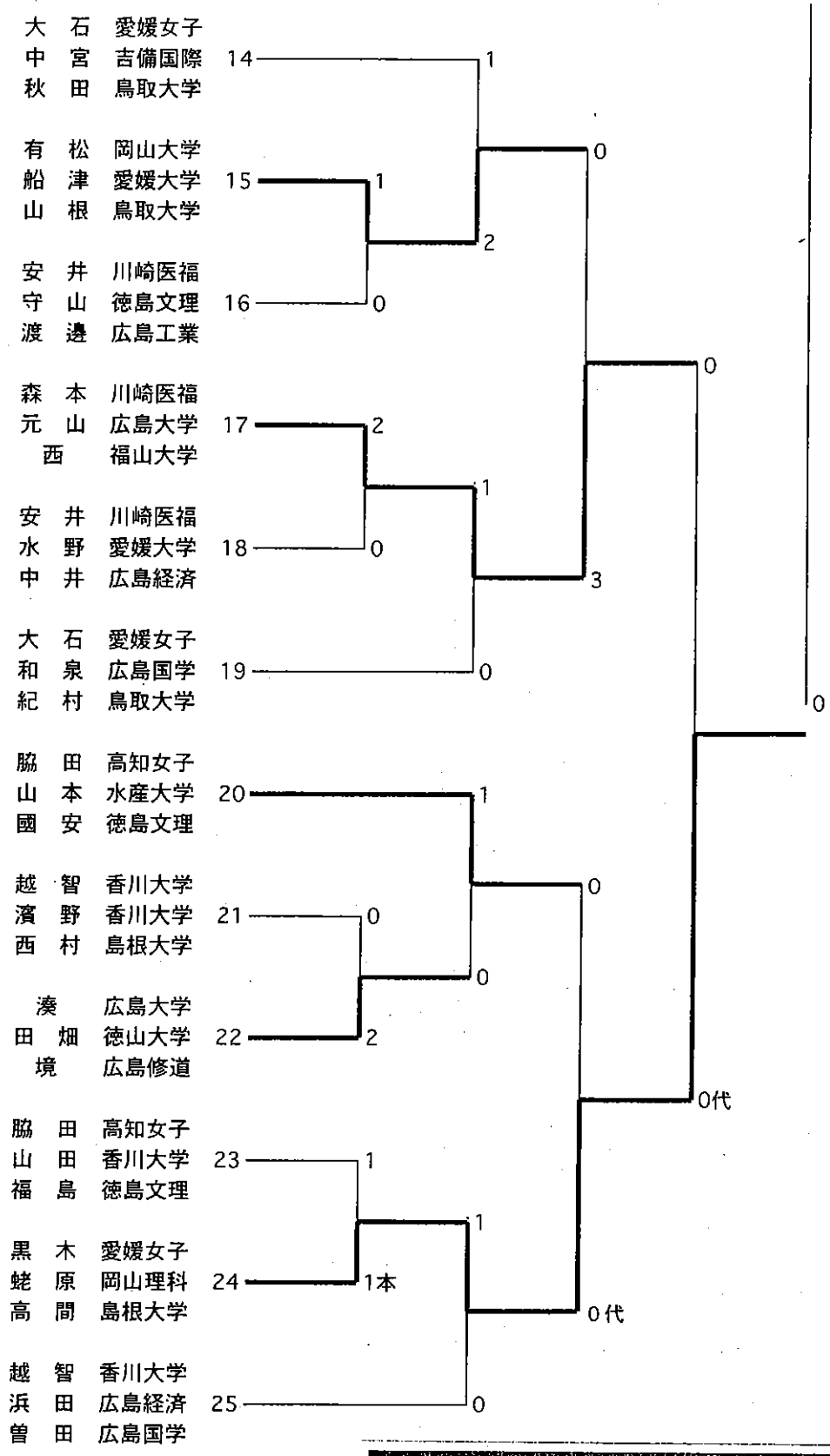
## 世界で活躍できる人材に

一口に世界観といってもそれぞれ異なっている。例えば、われわれ日本人が見なれている、日本が真中にある世界地図も、外国の人のにとっては見慣れない物となる。ヨーロッパやアフリカ中心の地図もあるし、アメリカ大陸中心の地図もある。たいていはこの三つに分類できるようだ。だから他の地図を見てそだった人と、日本の地図を見てそだった人とはものの考え方も多少異なってくる。小学校でも習ったように、地図は北が上にくるというのが常識である。しかしそれに不満を抱く人もいるのである。つまり、世界観というのは皆が同じものを持っているということではなく、それぞれによって異なってくる。狭い地域に閉じこもらないで固定観念などを守るだけでなく、広い世界観を持って自分の発動で生きてほしい。自分の獲得したもので世界の中で活躍していく、そういうチャンスは今目の前に与えられている。是非、自分の力でそれをつかんで世界で活躍できる人間になってもらいたい。



# 第4回中四国学生剣道リーゼニ選手権

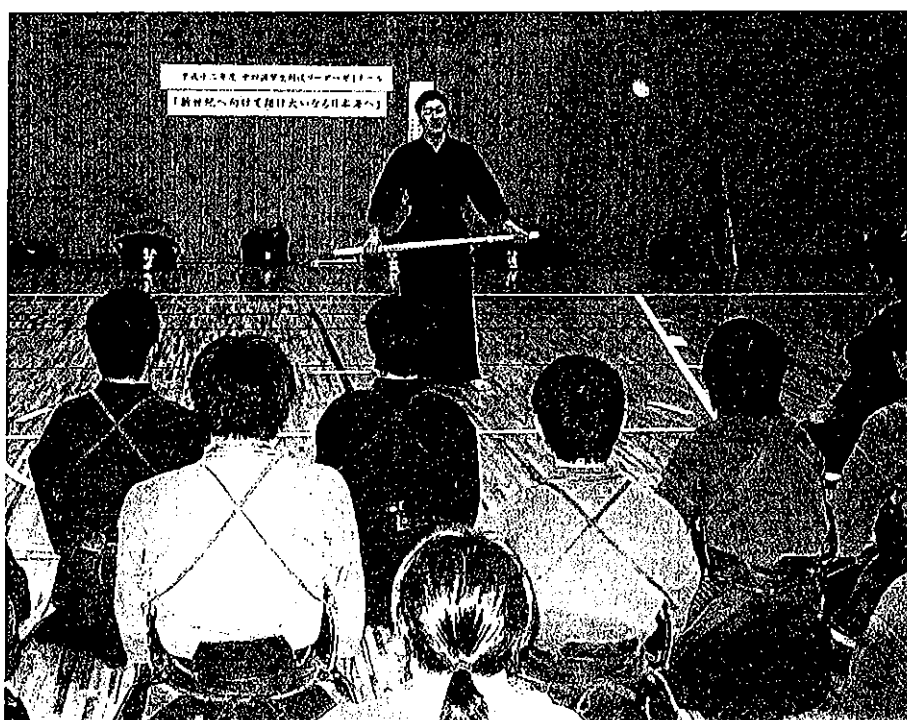




## 竹中健太郎先生実技指導メモ

竹中先生には模範稽古もしていただいた。掛かる学生は、昨年度、団体戦でベスト8に入った大学から選出された。見事な剣捌きに、思わず歓声があがった。以下の文章は、模範稽古前の実技指導で話された内容の概略である。

- ・ 素振りをする時の意識を大切に  
「素振りですれだけ強くなれるか」という課題を試してみること
- ・ 足の母子丘の当たりの意識を大切に
- ・ 打ちは一本一本打ちきるように
- ・ 竹刀先がしっかり振れることが大切
- ・ 打突の機会として、相手が崩れる瞬間と崩れた状態からもどろろとする瞬間が、一本をとれる可能性が高い。
- ・ 基本打ちの目的として、1つは、打突のフォームの修正、2つ目として、実践で使えるよう工夫するため行なっている。





# リーゼミおよび学生剣道について

鳥取大学 宮近幸逸

中国四国地区の北東の端、鳥取において、平成13年3月10日(土)、11日(日)の2日間にわたって「平成12年度リーダーズセミナー」が行われました。開催日の数日前から天候が怪しくなり、最近の3月にしてはめずらしく多くの雪が降り、リーゼミ参加者を歓迎するかのごとく積もりました。しかし、開催日には晴れ間がのぞき、2日目にはよい天候に恵まれ、無事終了することができました。悪天候の上、遠い鳥取までご苦労様でした。このたびのリーゼミは、鳥取大学剣道部監督・師範の湯村正仁先生が、昨年からの鳥取で行う準備を進めておられましたが、平成12年8月より神戸の病院に転勤され、そのため私が引継いで準備を進めてまいりました。なにぶんリーゼミの事情をしっかりと理解しないまま、また鳥取大学剣道部員も一生懸命協力してくれましたが、多くの不手際があったのではないかと心配しております。何卒ご容赦下さるようお願いいたします。

さて、リーゼミのスローガン「21世紀に向かって翔け大いなる日本海へ」はいかがでしたでしょうか。日本海側らしい天候の中、会期中の日本のリーダーは、大変不評なことばかりを行って、支持率は最低という状態でした。ところが今は支持率が最高のニューリーダーに交代しました。各大学の剣道部のリーダーはいかがでしょうか？リーゼミの効果で支持率は多少上がりましたか？剣道部のリーダーは、支持率ではかるものではないかもしれません。

ここで学生剣道について現在私が思うこと、これから希望することを述べてみます。

今大学では教育改革が急速に進められています。「自ら考え、自ら行動する。」「やる気を起こさせる。」「自立心が足りない。」などの言葉を多く見聞きするようになりました。そしてカリキュラムの工夫を行い、大変多くのエネルギーを投入して、大学入門ゼミ(大学での学び方、勉強することの動機づけなど)から始めてしっかり中身のある専門教育を行って、有為な人材を養成することが求められています。各大学で

## 新世紀へ向けて翔け



は大学の教育目的・目標を明示することが求められています。

このような情勢のもとで、学生が剣道を行うことは、これらの教育改革と合致する面が多いと感じております。しかし、鳥取大学における剣道部の現況は、最近部員不足に見舞われています。なぜなのか？いまの学生は「勉強、部活、アルバイト」の3つをこなすのが標準的になっているようです。これらの優先順位が、学生によってどのようになっているかが部活に大きな影響を及ぼしているようです。私のような古い人間のころは、アルバイトをするものは部活をやってはならない。となっていたと思います。いつから今のような状態になったか(アルバイトのため部活を休む)？大学生活は、本人の自由に任されているということ、これが原因ではないかと考えられます。これでは、部員が稽古に励むこと、打ち込むことが難しくなるな、と痛感しています。しかし、学生剣道のこれまでの長い歴史において、続けられている多くの大会は、剣道の理念を実践する場としていつまでも存続していかなければならないと考えています。

いまいちど、剣道の理念をここに記すことにより、大学において剣道を続ける学生が、勉強と剣道の両立を目指してくれることを期待いたします。

### 剣道の理念

「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である。」

最後に、中国四国地区各大学の剣道部学生諸君のますますの活躍を祈念いたします。

# 平成12年度中四国学生剣道リーダーゼミナールを終えて

島根大学 境英俊

今年度のリーダーゼミナールは雪の残る山陰・鳥取市において開催されました。大雪のため当日の朝までどの様にして鳥取まで行くか思案していました。幸い天気が持ち直し、何とか車で行くことができました。剣道は試合にしろ講習会にしろ剣道具が付き物ですのでいつもどうやっていくかが問題になります。最近は車の移動に慣れてしまっていますのでつい怠け心がおきてしまいます。学生には常々、自分の道具は自分で担いでいかなければならないと言っておきながらつい易きに流れてしまう自分が情けなくなります。まだまだ修行が足りないようです。

さて、今回は講師に鳥取県剣道連盟会長・全日本剣道連盟審議員である山根幸恵先生、鳥取大学地域教育学部教授・若良二先生、そして実技講師として前回世界選手権大会個人準優勝の竹中健太郎先生という豪華メンバーで開催しました。

まず山根先生による「千成瓢箪を奪った男一吉岡将監」という演題で講演をいただきました。山根先生は地元鳥取県はもとより全国の武道史に精通されており、私自身は非常に興味を持ってお話を伺うことができましたが、学生諸氏の様子を見たところやや真剣味に欠けた者が若干いたことは残念なことでした。

その後場所を移して竹中先生に実技指導をお願いしました。世界選手権大会後も全剣連の強化指定選手として日本のトップレベルの稽古を続けておられ、今回もその稽古内容の一端をご披露いただきました。特に区分稽古は学生達にとって忘れられないものになったことでしょう。また今回は特別企画として学生との模範稽古もお願いしました。稽古をいただいた学生は一生の思い出になることと思いますし、この経験を今後には是非生かしてもらいたいと思います。

指導終了後合同稽古に移りました。稽古にはお忙しいなかにも関わらず山根先生にもご指導

## 翔け大いなる日本海へ



いただき、また県内の山根幸信先生や若手の先生方にもご参加いただき盛大に行うことができました。

夜の部は例年通り木原先生の独壇場で各大学入り乱れての大宴会になり、終了後もそれぞれの部屋で懇親を深めた模様でした。

2日目は湯村正仁先生によるストレッチング、簡単な試合・審判法を行った後、3人制の団体戦を行いました。試合を見て感じたことは、有効打突の見極めが非常に甘いという点でした。各大学において常日頃審判を行う機会を増やすことも考えていただきたいと思います。

試合終了後、若先生による「リーダーのあり方」として、グローバルな視点を持つことの重要性についてのご講演をいただきました。

リーダーゼミナールも年々充実してきており、学生の取り組みもより積極的になってきています。参加した学生諸氏は今回学んだことを是非他の学生達に伝えてほしいと思います。

1泊2日という短期間でしたが、非常に充実したゼミナールであったと思います。ご多忙中にもかかわらず講師をお引き受けいただいた先生方、主管校の鳥取大学の皆さんに心からお礼を申し上げます。

## リーダーズセミナーを終えて

幹事長 戸田元丈

みなさんリーダーズセミナーお疲れ様でした。そして、木原先生、宮近先生、鳥取大学のみなさんありがとうございました。私はこのようなセミナーに参加できてとてもよかったと感じています。裏方の仕事があったために試合に参加できなかったのは残念でしたが、懇親会のほうで友達がたくさんできて非常にうれしく思っています。私自身はこのセミナーは大成功だったと思います。

この場をお借りして苦勞した点あげますので来年改善できたらと思います。

- ・ 3点間（木原先生、鳥取大学、自分）で話しを進めていたので意思の疎通が困難だった。
- ・ 実際に会場を視察していないのでイメージをつかみにくかった。

この2点が最も苦勞した点です。3点間という

ことで、3人で話し合っているわけではなかったものでそれぞれの考えていることと少しずれを生じるところがあったと思います。また、私自身が鳥取の会場を見たことがなかったために鳥取大学さんにして欲しい事があってうまく伝えられずに苦勞しました。

このような改善すべき点がありながらリーダーズセミナーが成功に終わったことはひとえに参加していただいた学生のみなさまと講演・実技指導をしてくださった先生方、そして裏方として働いてくれた方々のおかげです。本当にありがとうございました。最後に、リーダーズセミナーの成功は各大学のみなさまの参加なしにはできません。来年も成功させるためにみなさんどんどん参加してください。

## 新世紀へ向けて翔け大いなる日本海へ

実行委員長 山下 力

今中四国リーダーゼミを終えて、ホッとしている感じです。

今年の鳥取でのリーダーゼミは僕が実行委員長をやらしてもらいましたが、準備の段階からもうなにをやっているのかわからず、宮近先生に助けってもらったり、幹事長の戸田君にアドバイスをもらったりして、こんなことで本当にリーダーゼミを始められるか心配でした。また資料作りにあっても何もかもが初めてなのでここでもまた何をしていいのかわからず、また作ってみても穴だらけになり先生に頼りっぱなしで、こんなたいへんな作業だとは思った以上でした。

大会が始まっても、相変わらず自分が何をしたいのかわからず先生方に聞きながら、連盟の方に聞きながらやっていきましたが、プログラムの内容と実際の進行とで違うようなことが

出てきて途中でうろたえるような事などがあり参加された方々にたいへん、ご迷惑をおかけしたと思います。

そんな中での懇親会は皆様方のおかげでたいへんに盛り上がったようで、私的に実に有難かったです。その中で普段お会いできない先生方ともお話できて、充実した懇親会だったと思います。

今後、このような大会を運営するような事はないかもしれませんが、このリーダーゼミで得たものはとても大きいものだと思います。このような経験ができたことをうれしく思います。

最後になりましたが、今回、この大会が無事終了できたのも先生方、先輩方、連盟の方々、そして参加者皆さんの御協力のおかげです。本当にありがとうございました。